

ようこそ教会へ～旅する神の民として、ともに歩もう～

主任司祭 高祖敏明

講座案内チラシ用の挨拶文

父と子と聖霊の名による洗礼は、キリスト者として生きるうえでの基盤。洗礼によって、イエスの御父との関係に靈的に加わるといふ最大の恵みに引き入れられるからです。しかも神は、人々を個別的に、まったく相互のかかわりなしに聖化し救うのではなく、真理に基づいて神を認め、忠実に神に仕える一つの民として確立することを望まれました。そして、この民は喜びの訪れ（福音）を伝えながら、神の国の完成に向けた「旅」を人類とともに続けています。このキリスト者の原点を皆で深めること、これが本講座の目標です（『シノドス流の教会』16項、21項参照）。

I. 私たちの麴町 聖イグナチオ教会の現況を知る—2026年を中心として

1. 麴町教会献堂90周年(幼きイエズスの聖テレジア教会(六番町)の献堂式1936年3月22日、1945年5月空襲で焼失)。聖イグナチオ教会献堂(1949年4月17日)77周年
2. 信徒数：1949年：1174人⇒1999年(新聖堂献堂)：10090人⇒2025年：18006人
3. 宣教司牧評議会：毎年、教会テーマを設定(教会報『マジス』各号の題字下に明記。  
2026年度：「ひとつになろう キリストのうちに ～ともに歩む教会へ～」
4. シノドス：ともに歩む教会へ、各小教区がビジョン(デザイン)とパストラル・プラン(司牧計画)を作成し、実施するよう要請。→麴町教会100周年プラン策定委員会(後述)

II. 「ともに歩む教会」を主唱したシノドスとは何か？

1) シノドス性=シノダリティ=「ともに歩む教会」の意味するところ

「ともに歩む」教会、すべての兄弟姉妹と「ともに歩む」教会の姿は、神から与えられた教会の美しい特質です。「ともに歩む」、これこそが「シノドス的」な教会…わたしたちは、神の愛の御手へと歩む旅人、巡礼者…ともに支え合い、ともに耳を傾け合い、毎日小さな一歩を社会に刻んでいきます。その小さな一歩の積み重ねこそが、深い闇が支配する現代社会に希望を生み出し、神の救いのご計画の実現へとつながるのです(カトリック中央協議会『シノドスハンドブック』2024年7月)

2) 東京大司教・枢機卿 菊地 功「まだまだ続くシノドスの歩み」(聖書と典礼:2月1日)

2021年に教皇フランシスコが招集された世界代表司教会議(シノドス)第16回通常総会は、「ともに歩む教会のため—交わり、参加、そして宣教」をテーマに、2024年10月末まで続けました。このシノドスは、「シノドス性」そのものをテーマとして、最終文書を採択

して終わりました。…

教皇フランシスコは2025年3月、この最終文書の方向性をそれぞれの地方教会で具体化し、その成果を評価するための「教会総会」を2028年10月に開催すると宣言されました。2024年4月、日本の司教団に、「(シノドスの取り組みは)第二バチカン公会議が目指した神の民のあり方を実現しようとしている。新しい教会を作るのではなく、聖霊に導かれた教会を実現したい。シノドス性はイデオロギーではなく、民主主義でもない」と語られた。シノドス会期中には、「皆さんではなく、聖霊が主役です」と繰り返されました。

➡この方向性と「教会総会」の開催は、教皇レオ14世によって承認された。

参考：43 シノダリティとは、何よりもまず霊的な心構えです。洗礼を受けている人の日常生活と、教会の宣教のあらゆる側面に浸透しているものです。シノドスの霊性というものは聖霊の働きから生まれ、神のことばに耳を傾けること、観想、沈黙、心の回心を求めます。…「聖霊は確かな導き手であり、わたしたちの第一の務めは、その聖霊の声を聞き取れるようになることで…聖霊はあらゆる人を通して、あらゆる事象を通して、語っておられる」のです。…まことの霊性の道を、単独で歩ける人など一人もいません。わたしたちには、個人としても共同体としても、霊的養成や霊的指導も含めた支えが必要です。

### 3) 東京大司教・枢機卿 菊地 功「日本の教会のみなさまへ」(2025年7月14日)

…今後日本の教会においても、それぞれの教区、また小教区、修道院などの共同体で、「ともに歩む」教会を目指して取り組みを継続していきたいと思います。…

日本のシノドス特別チームは…以下のようなロードマップと取組みを考えています。

2028年(10月)の「教会総会」に向けて

2025年6月からの1年間 最終文書についての理解を深める期間。

2026年6月からの1年間 各教区、各分野で具体的に取り組みをする期間。

2027年6月からの1年間 各レベルでの評価を行う期間。

「最終文書」に記されていることについて具体的にどのような選択をするかは、それぞれの共同体が置かれている社会の現状や生きているコンテキストによって異なります。しかしわたしたちの教会がどこを向いて歩んでいるのか、どのような困難を抱えているのか、そういうことを共有しながら、ともに歩み、ともに祈り、ともに識別するすべを身につけることは重要であると思います。そのためにも、まず「最終文書」の理解を深める勉強会から始めていきます。

### 4) シノダリティの意味と特徴—最終文書の本文による説明から

28 「シノダリティ」や「シノドス的/シノドス流」という用語は、シノド(ス)(=教会会議)に集まるという、教会の古くから続く慣習より派生したものです。東方諸教会と西方教会のそれぞれの伝統において、「シノド(ス)」という語は組織を指すことも行事を指すこと

もあり、それらも時代とともにさまざまな形態をとり、主体も一様ではありませんでした。多様であっても、そのすべての形態に共通しているのは、対話し、識別し、決定するために集まることです。ここ数年の経験のおかげで、これらの語の意味はよりよく理解されるようになり、実際に体験されてきました。これらの語は、人々のより近くにあり、よりかわりを重んじる、神の家であり家族であってほしいという望みと強く結び付くようになりました。シノドスの歩みの中で、本文書の礎となるシノダリティの意味についての共通理解が形成されました。それは、シノダリティとは、キリストとともに、また全人類に結ばれて、神の国へ向けて、キリスト者がともに歩む旅だということ。また、宣教を志向したもので、教会生活のさまざまなレベルで集会を持つこと、互いに耳を傾けること、対話、共同識別、キリストが聖霊のうちに生きておられることの表れである合意形成、分担された共同責任のもとでの意思決定で成るものです。こうした考え方に従えば、シノダリティは教会を成り立たせているものだという意味がより理解できます（『教会の生活と宣教におけるシノダリティ』1参照）。簡単にまとめるとシノダリティとは、教会をより参加型で宣教的にするため、つまり、すべての人とともに歩みキリストの光を輝かせることのできる教会にするための、霊的刷新と構造改革の道だといえます。

**参考：**27 シナクシス(synaxis)とシノドス(synodos)、つまり感謝の祭儀の集会とシノドス会議には密接な結びつきがあります。形態は異なるものの、どちらにおいても。二人または三人がその名によって集まるところには、ご自分もその中にいるというイエスの約束（マタイ 18・20 参照）が表現されています。シノドス会議は、キリストとその教会との、聖霊の働きによって強められる一致を祝う行事です。聖霊こそが、教会というキリストのからだの一致を感謝の祭儀において確かなものとし、シノドス会議でも確かにしてくださるのです。典礼は、神のことばを聞くことであり、契約という神のイニシアティブへの応答です。シノドス会議もまた、まさにみことばが時のしるしの中に、そして信者たちの胸中に響くのを聞くことであり、神のみ旨を実現させるために識別する、集合体の応答です。（以下略）

### Ⅲ. 最終文書の基本的発想

#### 1) 最終文書の内容と構成—目次から

日本語訳版(カトリック中央協議会、2025年6月)：『シノドス流の教会 交わり、参加、宣教 《シノドス最終文書》教皇フランシスコ/世界代表司教会議第16回通常総会』  
教皇フランシスコによる付記(2024年11月24日(王であるキリストの祭日)バチカンにて)  
はじめに (1-12)

第一部 シノダリティの神髄——聖霊によって回心に呼ばれた者たち (13-48)

第二部 舟で一緒に——かわりの回心 (49-78)

第三部 網を打ちなさい——道筋についての回心 (79-108)

第四部 豊漁——きずなについての回心 (109-139)

## 第五部 「わたしもあなたがたを遣わす」——宣教する弟子という民族の形成(140-151)

結 び——すべての民のための祝宴 (152-155)

付 録

補注・資料

### 2) 教会生活が立ち帰る源泉—最終文書のよって立つ基盤

1 教会の生活における新たな歩みは、どれもが源泉への立ち帰りです。復活の日の夕刻に、二階の広間で弟子たちが体験した復活した主との出会いを、今一度味わうのです。このシノドス総会に参加する中で、わたしたちもまた彼らのように、主のいつくしみに包まれ、主の美に触れているのを感じました。霊における会話を味わい、互いに耳を傾ける中で、わたしたちの間に主の現存を感じていました。聖霊をお与えになることによって、ご自分の民の間で、多様性の調和である一致へと駆り立て続けておられるかたの存在です。

12 「最終文書」は、復活に関する福音書の記述に導かれて展開しています。復活の日の早朝に墓に駆けつけたこと、復活したかたの二階の広間での出現、そして湖畔での出現が、わたしたちの識別のインスピレーションであり、対話の糧でした。わたしたちは、聖霊になすべきことを教えていただき、ともに進むべき道を示してもらえよう、復活のたまものである聖霊を願い求めました。本文書によって本総会が言明、証言しているのは、シノダリティは教会を成り立たせている次元であり、すでに私たちの多くの共同体の経験の一部になっているということです。他方で、取るべき道、実践すべき取組み、探究すべき地平も提示しています。教会をシノドスへと招集した教皇は、司教の司牧的配慮に委ねられた諸教会に語ってくれるでしょう。「欺くことがない」(ローマ5・5)希望に支えられ、どのように私たちが旅を続けていくのかを一。

### 3) 最終文書の内容と構成についての概要—本文の説明から

11 この「最終文書」は、宣教への召命は同時に、各地方教会での回心と全教会での回心への召命でもあるという、使徒的勧告『福音の喜び』に示された視点(同書30参照)を踏まえた自覚の表明です。本文は五部構成です。第一部は「シノダリティの神髄」と題され、以降の内容を照らすための神学的・霊的基盤の概要を述べています。第一会期で生まれたシノダリティについての共通理解を再確認し、その霊的・預言的視点を展開します。わたしたちの心に宿る感情、イメージ、思考の転換は、司牧活動・宣教活動の転換と並行して進むのです。第二部は「舟で一緒に」と題され、かかわりの転換に焦点を当てています。かかわりが、キリスト教共同体を築き、召命、カリスマ、奉仕職で織り合されていく宣教を形づくるのです。第三部「網を打ちなさい」は、相互に密に結びついた実践を究明します。教会的識別、意思決定プロセス、そして透明性・説明責任・評価責任を担保する文化、という三つの現場です。これらに関しても、「宣教に向かう変容」の道を選ぶよう求められており、そのためには参

加型の組織体制の刷新が緊急の課題なのです。第四部は「豊漁」と題され、たまものの交換とぎずなを編むことを、新たなかたちで促進させる方法を概説します。それらは教会においてわたしたちを一致させるものですが、特定の地に根ざす暮らしが変貌するという今という時代には、新たなかたちが必要なのです。続く第五部「わたしもあなたがたを遣わす」は、欠いてはならない歩みに目を向けさせます。神の民に属する全員で、宣教に向かうシノダリティを形成するよう目を配るということです。(本文中の太字は引用者、以下同じ)

#### IV. 最終文書を読む

##### 第一部 シノダリティの神髄——聖霊によって回心に呼ばれた者たち (13~48) から

14 教会は、決定的な歴史の出来事、イエスの復活を、世にあかしするために存在しています。復活したかたは、世界に平和をもたらし、ご自分の霊のたまものを与えておられます。生きておられるキリストは、真の自由の源、欺くことのない希望の礎、神の真のみ顔の啓示、人間の最終目的の啓示であります。復活の信仰にあずかり、その証人となるには、自分の内面的なむなしさ、恐れ、疑い、罪の闇の自覚が必要だと福音書は教えています。ですが、闇の中にあっても勇気を出して外に出て探し求める人は、実は自分が探されていて、名を呼ばれており、ゆるされ、イエスとともに兄弟姉妹へと遣わされていることに気づくのです。

##### 神の民である教会、一致の秘跡

15 神の民であるというアイデンティティは、父と子と聖霊の名による洗礼から生まれます。このアイデンティティは聖性への招きとして、救いのたまものを受けるようすべての民を招く宣教への派遣として具現化されます(マタイ 28・18-19 参照)。ですから洗礼—この洗礼において、キリストがわたしたちにご自身を着させ (ガラテヤ 3・27 参照)、神の子として霊から新たに生まれさせてくださいます (ヨハネ 3・5-6 参照) —から、宣教するシノドス流の教会が生まれるのです。すべてのキリスト者の生は、三位一体の神秘にその起源と目指す先を有しており、その三一の神秘がわたしたちのうちに信仰、希望、愛のダイナミズムを呼び起こすのです。

16 「神は、人々を個別的に、まったく相互のかかわりなしに聖化し救うのではなく、彼らを、真理に基づいて神を認め忠実に神に仕える、一つの民として確立することを望んだ」(『教会憲章』9)。み国を目指して旅する神の民は、交わりと一致の源であるエウカリスチアによってたえず養われています。「パンは一つだから、わたしたちは大勢でも一つのからだです。皆が一つのパンを分けて食べるからです」(I コリント 10・17)。教会は、キリストの聖体の秘跡によって養われ、主のからだとして形成されます(『教会憲章』7 参照)。「あなたがたはキリストのからだであり、また、一人ひとりはその部分です」(I コリント 12・27)。教会は、恵みによって活気を得た、聖霊の神殿です(『教会憲章』4 参照)。教会を生き生きとさせ、築いてくださるのはまさに聖霊であり、この方がわたしたち皆を、霊的な建物の生きた石に

してくださるのです（Iペトロ2・5、『教会憲章』6参照）。

17 …異なる文脈、異なる文化の中で生きる、それぞれの部族、言語、民族、国から集められる…神の民は、洗礼を受けた者たちの単純な総和では決してなく、シノダリティと宣教の共同体的・歴史的な主体であり、今はまだ時の中を旅していながらも、すでに天上の教会との交わりのうちにある…個々の教会が根を張るさまざまな文脈の中で、神の民は救いの「よい知らせ」を告げ知らせ、あかししています。世にあって、世のために生きること、神の民は地上のすべての民とともに歩み、彼らの宗教や文化と対話し、そこにあるみことばの種を認め、神の国に向けて前進するのです。…

### 神の民の秘跡的ルーツ

21 教会がたどったシノドスの旅で気づかされたのは、多様な召命、カリスマ、奉仕職には一つのルーツがあるということです。それは、「皆一つのからだとなるために洗礼を受け、皆一つの霊を飲ませてもらった」（Iコリント12・13）ということです。洗礼は、キリスト者として生きるうえでの基盤です。すべての人は洗礼によって、神の子となる、つまりイエスの御父との関係に霊的に加わるという最大の恵みに引き入れられるからです。一人ひとりに等しく与えられているこの尊厳に勝るものはなく、この恵みによってわたしたちはキリストをまとう者となり、ぶどうの木の枝のようにキリストに接ぎ木されるのです。わたしたちにとっては栄誉な「キリスト者」という名には、その恵みが含まれています。それは、わたしたちの生き方の基盤であり、わたしたちを兄弟姉妹としてともに歩めるようにしてくれるのです。

24 洗礼は、一連のキリスト教入信の流れの中で捉えなければ、十全に理解することはできません。主が、教会の奉仕職と霊のたまものを通してわたしたちを復活への信仰に導き、三位一体の交わりと教会の交わりに組み入れてくださる一連の歩みです。この行程には、対象者の年齢、東方諸教会と西方教会の伝統のそれぞれ異なる強調点、各地方教会の特性に応じた、実に多様な形態があります。それらを通して、その子らとともに歩むことで教え導く、教会のいつくしみ深い顔が表れます。教会は、その子らに耳を傾け、彼らの疑問や問いに答える中で、一人ひとりの子らが携える新しさ、つまりその人の人生、その人の文化によって、豊かにされるのです。こうした司牧活動の積み重ねの中で、キリスト教共同体はシノダリティの初歩の姿を、多くの場合ほとんど無自覚に経験しているのです。

25 キリスト教の入信の過程にある堅信の秘跡は、聖霊の個別の注ぎによって信者の生を豊かにし、あかしに備えさせます。霊はイエスを満たし（ルカ4・1）、油を注いで祝別し、福音を告げ知らせるために遣わしました（ルカ4・18参照）。その同じ霊が信者の上に注がれ、神に属する印となり、聖別のための油の注ぎとなるのです。このため堅信の秘跡は、洗礼を

受けた人と共同体の生活の中で聖霊降臨の恵みを現実にするものであり、宣教の炎に駆り立てられる教会の驚くべき働きを新しくする、大きな価値をもつたものです。出向いて世界の隅々に分け入る勇気と、あらゆる民族とすべての文化に理解される力を備えた、教会の圧巻の姿です。すべての信者は、その勢いに協力し、聖霊が各自に豊かに分け与えるカリスマを受け入れ、それらを神の国のために謙虚に創意をもって積極的に役立て、尽くすよう求められているのです。

26 感謝の祭儀、とりわけ主日の祭儀は、聖なる神の民が集いまみえる、第一の基本のかたちです。感謝の祭儀において、「教会の一致が表され、もたらされる」（『エキュメニズムに関する教令』2）のです。すべての信者の「十全に、意識的かつ行動的……参加」（『典礼憲章』14）をもって、さまざまな奉仕と司教や司祭の司式をもって、キリスト教共同体は目に見えるものとなり、その共同体の中で、すべての人がそれぞれ分担する、宣教に対する共同責任が果たされるのです。ですからキリストのからだである教会は、感謝の祭儀を通して、一致と多様性との調和的な連結を学びます。教会の一致と感謝の祭儀の多様性との、秘跡の神秘的的一致と典礼の多様な伝統との、祭儀の一致と召命やカリスマや奉仕職の多様性との、調和的な両立です。聖霊の生み出す調和は一様ではないことを、教会のたまものはどれも共同体の構築に向けられていることを、感謝の祭儀ほど雄弁に語るものではありません。感謝の祭儀は、洗礼を受けたすべての人が願い求める、いまだかなわぬ完全で目に見える一致の表れでもあります。主日の感謝の祭儀を望みつつも、それがかなわない場合、共同体はみことばの祭儀に集います。そこにも、キリストはやはり現存しておられるのです。

## V. パストラル・プランの策定—10年後にこうあってほしい麴町 聖イグナチオ教会

### 1) 今次のシノドスが求める各小教区版パストラル・プラン(司牧計画)の作成と実施

#### ①「デザイン」:神が救いの想いの中でお考えになっている未来へのビジョン

➔私たちが勝手に思い描くものではなく、信仰共同体の中で祈りのうちに識別し、感じ取るもの。「聖霊が主役」(教皇フランシスコ)。

#### ②「プラン」:デザインを人間の知恵と知識を使って、より具体化した計画面案

➔神の想いを反映して、皆で一緒に考案していくもの。各自には信仰の感覚(センス)が求められる。

#### ③「プロジェクト」:プランをさらに具体的な活動へと展開する行動に向けた指針

➔近い将来に実現し、実行する行事や活動の具体的な実施計画を策定する。

### 2) カトリック麴町 聖イグナチオ教会のパストラル・プランの作成へ

2025年3月:麴町教会100周年プラン(パストラル・プラン=司牧計画)策定準備委員会を設置(背景:2036年、小教区としての麴町教会は献堂100周年を迎える)

➔本委員会の設置に向けて、私たちの聖イグナチオ教会の現状分析、直面する課題の設定、

期待される司牧計画の方向性などを議論して報告書にまとめた。

- ① 2026年4月(復活祭後)、麴町教会100周年プラン策定委員会を設置→すでに始動
- ② 理念: ひとつになろう キリストのうちに ～ともに歩む教会へ～
- ③ 目的: 当教会が聖霊の導きの下、豊かで生き生きとした持続的発展を遂げることができるよう自らの特性と時代や地域の環境変化を考慮しながら、誕生100周年に向けて教会全般(信仰と霊性・組織・運営・活動および施設設備、財政等)に関わるビジョン(デザイン)とパストラル・プランを策定すること。併せて、策定事項の実現・実行に向けての方策を立て手配を行うとともに、その進捗状況についても評価を行う。等々。

### 3) 私たちの聖イグナチオ教会の「ともに歩む教会の祈り」について

この祈りは「新教会建設のための祈り」が元となっています。現聖堂は1999年6月6日に献堂式を祝い、昨年献堂25周年を祝いました。元の祈りは、現聖堂の建設が始まった頃からミサの結びに皆で唱えたもので、新聖堂が神の導きのもとで発展するように祈りました。25周年記念行事の一環で開いたタイムカプセルの中にも入れられていました。

新聖堂が、慈しみの神、救い主キリストとの出会いの場となるよう願いながら、設計者・建築工事にたずさわる人々・祈りと募金をもって協力するすべての人に神の祝福が注がれるよう祈りました。

「ともに歩む教会の祈り」は「新教会建設のための祈り」を下敷きにしつつも、国際化が進んだ私たちの教会共同体の現状にかんがみ、言葉や国籍・背景を超えてキリストの食卓を囲む私たちが希望の巡礼者となり、「光と塩」として社会に仕えることができるよう祈っています。英語、スペイン語、ベトナム語、インドネシア語、ポルトガル語、そして日本語の6言語で唱えることができるように工夫・作成しました。

同時に、シノドス(世界代表司教会議第16回通常総会)の「ともに歩む教会一交わり、参加、宣教」が示す教会像に学び、シノドスの手引きに従って聖霊による導きを識別し、回心を重ねながら当教会の司牧計画(パストラル・プラン)の策定を方向付けるものともなっています。

カトリック麴町聖イグナチオ教会の司牧計画は、「ひとつになろう キリストのうちに ～ともに歩む教会へ～」を基本理念に据え、2036年に迎える麴町教会100周年(聖イグナチオ教会の前身、幼きイエスの聖テレジア教会の献堂は1936年)に向けて持続可能な教会共同体づくりを目指しています。この祈りは、教会構成員の皆、その一人ひとりが「ともに歩む教会」のメンバーであることを示しています。

私たちの祈りとして唱えるようにしていただきたいと思います。これからも折に触れて唱え、祈りをもって「交わり、参加、宣教」の教会共同体づくりを支えていただければと願っております。